

水族館月報

No. 177

1967年5月

5月の入場者数

一 般		団 体		有料合計	特別観覧
大人	小人	大人	小人		
56,793	1,392	19,184	1,267	78,636	462

前年度比	1966	1967	増 減
入場者数	85,164	79,098	-6,066

水族館記事

- ◎ 6日 モジャコ魚(養殖ハマチの種苗を採捕)が始まり、流れ藻につく魚の第1陣が入槽。
今年メダイの幼魚(6~25cm)とウマヅラハギの幼魚(3~7cm)がとくに多く、月末までに前者は467個体、後者は2765個体も入った。両種ともに、餌付きは極めて良いが、メダイは成長とともに100~200m層に移動する習性のためか、死亡するものが多く、また、ウマヅラハギは互いの斗争がはげしくて、ともに歩止りは良くない。
- ◎ 同日 英国トリ-水産研究所低温生化学研究室長 K. M. Love 博士は、近畿大学水産学科志水寛教授、奈良女子家政学部遠藤金次助教授らの案内で視察来館。
- ◎ 7日 北浜沖の磯で、ヒョウモンダコ、*Hapalochlaena maculosa*、(全長8cm)を採集。No.28-2の小バットに展示した。
- ◎ 9日 中庭の予備槽R-2~5の上に棚を作って、そこに新設した加^可搬式予備槽(硬質塩ビ製 100×90×30cm 250ℓ入り)6個は、小型動物蓄養用として、本日より開放式(給水は第2水槽室給水主管より分岐)で使用開始。今後この6槽をTR-1~TR-6と呼ぶ。
- ◎ 11日 No.2水槽のオオトゲトサカに共生していたクモヒトデの1種2個体を、内海教授より入村精一氏に送り、⁵⁾固定を依頼した。これは、腕長12~15cm、白地に紅色の縞模様があり、オオトゲトサカの色彩に良く似ている。

- ◎ 13日 北浜地引網よりヤマトメリベ、*Melibe japonica* (全長31cm)が入槽。網の中でもまれたため、背部突起は最後部の1個を残して、すべて脱落してしまったが、元気で、№1水槽に展示し、先月入槽のミカドウミウシと共に、入館者の注目を集めている。その後(16日)試みにイソスジエビとアゴハゼを与えてみたところ、頭部を枚網のようにひろげて、たくみに捕食することが判りその状態をフィルムに収めた。月末現在、背部突起が再生しつつあり、これも記録中。
- ◎ 14日 大阪の熱帯魚店より、カクレクマノミが共生するイソギンチャクとして著名なハタゴイソギンチャク、*Stoichactis kenti* (沖縄産)が入槽。長途の陸上輸送でひどく弱っているため、TR-5に仮収容し回復をまつことにした。
- ◎ 17日 江川のエビ漕ぎ網漁師より、イツテンアカタチ(全長25cm)1個体が入槽。本種は棲息層がやや深い上に、傷つきやすく、これまでも数回、一本釣や底引網で入ったことがあるが、いずれも長生きしなかった。本日入槽の個体は、尾びれがかなり傷ついていたが、月末にはほとんど治り、元気である。就餌は未確認。
- ◎ 18日 搭島北端で潜水採集したツマグロハタンポ(全長17.5cm)は、成熟卵をもっており、腹部を圧迫すると球形分離浮遊卵を産出した。
- ◎ 21日 江川港のモジャコ漁船より、流れ藻の魚数種と共に、プリモドキ(10~29cm)30個体が入槽。例年、数個体の幼魚は入槽するが、今回のように大型まじりで数多く入ったのは始めてである。15cm以上のもの20個体をK水槽に、それより小型のものはTR-2に収容し、翌日より活潑に就餌している。
- この魚は大型のサメよりそって泳ぐ習性からパイロットフィッシュと呼ばれている。それで №26水槽へ大・小2尾を放してみたところ、ドチザメ(全長60~130cm)には全く関心を示さず、シロザメ(50~110cm)とはやや密接に共泳した。しかし 同一個体には長続きはせず、次々によりそう相手を変えるのが見られた。ドチザメより小型のシロザメを選んだのは、おそらく、プリモドキが本来一諸に泳ぐ外洋表層性のサメの体色に、シロサメの方がよく似ているためと思われる。
- 翌日には同槽に混養してある肉食性の磯魚に捕食されたく、行方不明となった。
- ◎ 27日 №28~9で死亡したダルマオコゼの腹部が大きいので、開いてみたところ、卵巣がよく成熟し、一部に透明卵が認められた。
- ◎ 29日 T-1の単独循環が止り、クマノミ類が全滅した。原因はサンゴイソギンチャクが足盤でサイフォン管をふさいだため、濾過槽への通水が止り、エアリフトによる循環ができなくなったものと判った。イソギンチャクはかなり弱っていたが、開放式にきりかえて、回復の見込みである。サイフォン管底部はすぐに改良して、イソギンチャクがくっつけないようにした。
- ◎ 30日 搭島東水道で潜水採集中、後鰓類の珍種ムラサキウミコチョウ、*Sagaminopteron ornatum*を採捕した。低潮線下1.5mの海底に沈んだフクロノリ類の上に乗ったもので、全長わずかに15mmであるが、鮮やかな紫紅色をしているのと、ダイバーが近づいたときにちょうど泳ぎだしたので目に止った。

これは史上一番目の貴重な標本なので、生態写真を撮影後、すぐに固定し、保存することにした。

◎ 5月の動物入手概況

1. 採集作業

日時	採集場所	方法	人員	主な目的動物
3日午後	搭 島	scuba	1	サンゴイソギンチャク
7日〃	北浜沖暗礁	〃	1	ウミシダ類
12日早朝	搭 島	釣・磯採集	1	メジナ類
〃 午後	バンガロー下の磯	scuba .磯	3	トゲトサカ類・キヌバリ
18日午後	搭 島	scuba	2	熱帯性小型磯魚
25日〃	海水取入口附近	素もぐり	1	サンゴイソギンチャク
30日〃	搭 島	scuba	2	ウニ類

上記のほかに 北浜での地引網便乗採集2回。

○ 主な採集動物名(☆印は1962年4月1日以降はじめての入槽動物)

無脊椎動物 : ザラカイメン ハナガサクラゲ、サンゴイソギンチャク、オオトゲトサカ、
ビロードトゲトサカ、オオアカフジツボ、オトヒメエビ、ギンタカハマガイ、☆ムラサキウミ
ゴチャウ、ハナオトメウミウシ、☆ヤマトメリベ、☆ヒョウモンダコ、オオウミシダ、ヒガサ
ウミシダ、ラップウニ、シラヒゲウニ、マダラウニ。

魚 類 : ヒフキヨウジ、ミナミハタンポ、ツマグロハタンポ、ミギマキ、イタチウオ、
ハナハゼ、キヌバリ、モンツキクマノミ、ソラスズメダイ、カミナリベラ、ホンベラ、シラコ
ダイ、ヨソギ、アオサハギ、ベニイザリウオ。

2. 購 入

雑賀崎一本釣漁師と江川港エビ潜ぎ網漁師からの入槽があい次いだ上に、モジャコ漁船より流れ
藻の魚が8回にわたって大量に入ったため、飼育係はその応接にいとまがない有様で、今月初めに
増設したTR-1~6予備槽も、たちまち満員になってしまった。

○ 主な購入動物名

無脊椎動物 : ☆ハタゴイソギンチャク、トゲシヤコ、アサヒガニ、ヘイケガニ、メガネカラ
ツバ コブカラツバ、ケブカツノガニ、☆コロモガイ、ウズラミヤシロガイ、☆トカシオリイ
レボラ、テナガダコ、ワモンダコ、ヨツアナカシパン。

魚 類 : シビレエイ、ハナアナゴ、マアナゴ、タケウツボ、シイラ(幼)、ブリモドキ、
メダイ(幼)、イシガキダイ(幼)、オキナヒメジ、シロアマダイ、イツテンアカタチ、
☆ナガハナダイ、☆ヒメハナダイ、チョウセンバカマ、タキベラ、アオブダイ、チョウチョウ
ウオ、ウマヅラハギ(幼)、ハリセンボン、ヒメオコゼ、ワニゴチ、ガンゾウビラメ、

イザリウオ、ハナオコゼ。

◎ 飼育概況

G水槽のエビスダイの白点病(前号報)は、冷水循環を続けた結果、この月末にはほとんど症状がなくなった。しかし チカメキントキは第3期症状に近くなり見苦しいので、処分した。№34・36・T-7・F・J・Kの各槽に発生した白点病は、いずれも早期治療できたが、開放式のR-1では、薬液処理ができず慢性化している。また、C水槽のチョウチョウウオ、シラコダイにビブリオ症と思われる皮膚病が著しいが、他魚へは感染していない(同槽は単独循環中)。

無脊椎動物のコレクションが先月に引続き豊富であったうえに、魚類の補充が多かったため、今月の飼育動物総数は昨春に次いで、再び600種の大台を越えた。

5月31日現在、飼育中の動物は、総計605種5,447個体以上で、その内訳は次の通り。

このうち、観覧水槽に飼育展示中の動物は581種4,990個体以上。

カイメン類	3種	11個体	ゴカイ類	8種	47個体	タコ類	5種	29個体
ヒドロ虫類	4種	36(群)	フジボ・カメノテ類	6種	95種	ウミシダ類	4種	19種
ハチクラゲ類	2種	3個体	シヤコ類	2種	7種	ヒトデ類	9種	130種
ウミトサカ類	7種	15種	エビ類	21種	125種	クモヒトデ類	8種	31種
ヤギ類	9種	47種	ヤドカリ類	15種	109種	ウニ類	16種	124種
ウミエラ類	1種	6種	カニ類	50種	480種	ナマコ類	8種	24種
イソギンチャク類	12種	602種	カブトガニ類	1種	3種	ホヤ類	4種	56種
イシサンゴ類	18種	97種	ビザラガイ類	3種	11種	軟骨魚類	9種	63種
スナギンチャク類	3種	3種	巻貝類	66種	483種	硬骨魚類	259種	2328種
ツノサンゴ類	2種	3種	ウミウシ類	13種	31種	(内淡水魚)	28種	146種
ハナギンチャク類	1種	7種	二枚貝類	32種	300種	は虫類	3種	19種
ホウキムシ類	1種	3種						

資 料

5月の気象(午前9時観測)

第1水槽室(水温・比重は№26水槽)

	上旬	中旬	下旬
晴天日数 : 21	6	8	7
室温(°C)	$\frac{18.9 \sim 22.1}{20.5}$	$\frac{19.1 \sim 22.2}{20.9}$	$\frac{22.1 \sim 23.8}{22.8}$
水温(°C)	$\frac{19.6 \sim 21.5}{20.4}$	$\frac{20.2 \sim 22.3}{21.3}$	$\frac{22.6 \sim 23.9}{23.9}$
比重(15°C)	$\frac{23.38 \sim 25.07}{24.22}$	$\frac{25.11 \sim 25.33}{25.22}$	$\frac{25.10 \sim 25.53}{25.31}$

第3水槽室(水温)

H 水槽 (°C)	$\frac{19.0 \sim 21.2}{20.3}$	$\frac{21.0 \sim 22.1}{21.4}$	$\frac{22.2 \sim 23.8}{23.0}$
T-8水槽 (°C)	$\frac{20.2 \sim 21.9}{20.9}$	$\frac{21.3 \sim 22.9}{21.9}$	$\frac{22.9 \sim 24.1}{23.6}$

海水取入口

水 温 (°C)	$\frac{20.3 \sim 22.6}{21.5}$	$\frac{21.0 \sim 23.3}{22.1}$	$\frac{23.0 \sim 25.0}{24.0}$
比 重 (15 °C)	$\frac{24.00 \sim 25.44}{24.72}$	$\frac{25.25 \sim 25.54}{25.39}$	$\frac{25.29 \sim 25.69}{25.49}$

昭和42年6月15日(第177)

編集兼発行者 森 下 正 明

発 行 所 京都大学瀬戸臨海実験所
和歌山県西牟婁郡白浜町
電話(白浜)2047・3515